

リチャード・M・ティトマス

—— その人と業績* ——

三 浦 文 夫

1

1973年4月6日、リチャード・モーリス・ティトマス (Richard Morris Titmuss) は死んだ。イギリスの生んだ現代の社会保障、社会福祉研究の第一人者であり、さらに卓越した社会思想家と目されたティトマスは、65歳の若さでこの世を去ったのである。死因は癌ということであった。

私事にわたるが、筆者がティトマスに会ったのは、1972年の春であった。その前年に、ティトマスの論文集 *Commitment to Welfare* の邦訳 (三浦文夫監訳『社会福祉と社会保障——新しい福祉をめざして——』東京大学出版会刊、1971年) を行った関係もあって、原著者に表敬の挨拶をするためでもあった。秘書のA・ヴィヴィアン女史の話によると、教授はちょうどカナダ旅行から帰ってきたばかりで、疲れていて、その上身体を幾分損っているようすなので、面会時間は短くして欲しいといういことであり、ほんの10分前後時間をさいてもらうことにした。今にして思えば、その頃すでにティトマスの身体は癌にむしばまれていたのかもしれない (もっともティトマスが自ら癌と知ったのは、それから数カ月後のことのようにである)。しかしティトマスは、疲労とか身体の故障のことなどは素振りにもみせず、われわれを温かく迎えてくれ、つい親切で暖かいもてなしに、小一時間も話し込んでしまった次第である。ややウエルズ訛りながら、分りやすい英語で、当時わが国でも話題になっていた例のシーボーム委員会のレポートについて率直な感想を述べられたり、その年の7月にヘーグで行われる国際社会福祉会議でティトマスが依頼されている発題講演のアイデアなどについて話しをしてくれた。そして最後に日本の社会福祉について非常な興味を示され、自分も来年は65歳で大学を退職するが、そうすると今よりも暇

ができるから、折をみて訪日をしたいということなどを気さくに話してくれたりした。もし神がティトマスに今少しの寿命を与えてくれたならば、わが国の社会保障、社会福祉などについても、あるいは貴重なサジェッションなどを得ることができたのではないかと思ったりする。

その時の印象では、ティトマスは180センチを超えるほどの長身で、体つきは痩せぎすであり、ホームスパン風のやや厚っぽい上衣をつけ、身なりについては無頓着のように見えた。ほとんど白髪のない柔らかそうな頭髪をもち、瞳はブルーに澄み、ややそげた頬に人なつこい微笑を浮かべながら、相手のいうことをじっと聞く姿は今も記憶されている。この温容に二度と接することはできないのである。ティトマスの死は、筆者のような、異国のもので、一面識しかなかった人間にも一種のショックと淋しさを与えたが、おそらくティトマスと親しく接し、その警咳に接した人びとにとって、その死は痛恨のきわみであったと思われる。そしてティトマスの死をいたむものは、友人、教え子などばかりではなく、ティトマスの論争の相手や、ティトマスと同じ立場、考え方をもたない人びとの場合にも同じであったようである。たとえばティトマスはその謙虚で、人間味豊かな人柄にもかかわらず、その学問・研究に対する態度には厳しいものがあり、このため学問的に意見を異にする相手に対しては、時として激しい批判を行う場合もあった。また教授自身の研究は一つの体系として確立したものではなく、試行錯誤的な懸命な努力の積み重ねであり、その論旨には時として矛盾することもあったりしたこともあって、ティトマスの主張・見解に反対したり、批判する学者・研究者も少なくはなかったようである。しかし、それにもかかわらず、ティトマスが現代においてもっとも示唆に富む提言を行い、かつ、独創的な研究者の1人であることは、すべての人びとの認めるところであり、それだけにその死は、すべての人びとに惜しまれることになったのである。

このすぐれた、そして影響力に満ちた現代の碩学の生涯は、そのおだやかな人柄と温容から想像されるほど、

* この小論は社会保障研究所編『社会保障の潮流——その人と業績——』(昭和52年3月刊行、全国社会福祉協議会) に収録された「リチャード・M・ティトマス」に加筆をしたものである。研究所の方針により、ここに再録した。

平和で恵まれたものではなく、とくに少年期から青年にかけては、人生の下積みの生活を経験し、世の光を浴びるようになるのは、その中年以降のことである。その意味では、ティトマスもまた立志伝中の一人であったのかもしれない。

2

ティトマスは1907年10月、ウェルズのベッドフォードシャ (Bedfordshire) に生まれた。ティトマス家としては2番目の子供であり、5歳年上の姉がいた。父、モーリスはそこで小農業を営んでいる。ティトマスは学齢に達するや、リュトン (Luton) にある農家の子弟を対象とした小さな私立の小学校に入学したが、しかし、病弱であるうえに、通学距離が遠すぎたという事情もあって、学校は欠席しがちであった。このためにティトマスの勉強はもっぱら自宅での独習ということにならざるを得なかったようである。

やがてティトマスは公立学校(public school)に移るが、しかしそこでも満足な教育を受けていない。それは病弱ということではなく、むしろ経済的理由によるものであった。すなわち第一次大戦後の不況は、イギリス農業に打撃を与えているが、ティトマスの一家もこの影響を受け、農業を維持することができなくなる。このため1920年の初めに、一家は生れ故郷のウェルズを捨てて、ロンドン郊外に移り住むことになる。そして父親は運送業に雇われることとなり、最初は馬車曳きなどの業務に携わることになる。当時ようやく14歳になったティトマスは、公立学校を途中で退学し、クラーク商業専門学校の6ヵ月の事務員養成課程に入り、これを出ると直ぐに電話会社の給仕となり、家計を助けることになった。

不遇な生活はそれに止まらない。1926年に父、モーリス・ティトマスが急死した。このためにティトマスはわずか18歳の若さでありながら、一家の柱となり、家族を養う重荷を背負うことになったのである。この故もあって、ティトマスは伝手を求めて、カウンティ火災保険会社に転職し、それから16年間、この会社で保険業務を中心とするサラリーマンの生活を送ることになるのである。

ティトマスの苦勞は、年若くして一家の経済的支柱として働かなければならなかったということだけではなく、彼はやや神経症的であった母親の精神面での抛り所にもならなければならず、この母親の面倒は、彼女が死ぬ1972年まで続くのである。

このようにティトマスは、その少年期から青年期にかけて、正規の教育らしい教育は受けていない。しかし、

彼は、このことについてそれほど気にしていなかったようである。後になって彼は、試験地獄に苦しめられたり、覚えたくもない文章を無理やり覚えさせられる責苦から自由であったことは感謝したいくらいのものだと述懐している。しかし、彼は学校でこそ教育を受けなかったが、学ぶことを止めていたわけではない。彼は同僚から、あるいは仕事のなかから不断に学び、とりわけ公立図書館は彼にとって最上の学校ともなったのである。

ティトマスは後になって、自分の生涯には3つのすばらしく幸福な出来事があり、それが人生の転機になっていると述べている。その第1番目の転機が1934年に訪れている。それはケイ・ミラー (Kay Miller) との出会いである。ケイは当時ロンドンにあった失業者のための救済団体で働いていたが、ティトマスは彼女とウェルズ地方のあるユース・ホステルで知り合い、それ以降、二人の仲は急速に親密なものとなった。二人の結婚には多くの障害もあったが、1937年、結婚する。ケイはリチャードよりも5歳年長であったが、彼女はリチャードにとって、かけがえのないベター・ハーフであるだけでなく、ある時には先生でもあり、またある時には共同研究者でもあった。

リチャードはケイの影響もあって、平凡なサラリーマンから、社会問題や政治問題に関心を持つようになっていく。そしてまたケイの援助で、本格的な勉強をはじめ、索引のひき方、ノートのとり方、論文の書き方まで学ぶようになる。もちろんこれらの勉強は、仕事が終わった後の家庭のなかであったり、またその頃から出入りをはじめた自由党の演説会や集会であったり、そして例によって公共図書館であったりしている。

このティトマスの努力の最初の成果は、リチャード・カストン (Richard Caston) という筆名で書かれた論文となっていた。カストンというのはケイのミドル・ネームである。この処女作は『犯罪と悲劇』という本に収録されているが、その内容は時の政府の外交政策、とりわけ戦争に傾斜していく政府の政策に対して、鋭い批判を行ったもので、新しい意味でのラディカリズムの立場を鮮明にしている。

ついで1938年ティトマスは『貧困と人口』 (*Poverty and Population*) という書物をマクミラン社から出版している。ティトマスの最初の著書である。この本には「現代の社会的浪費に関する実証的研究」という副題が付されているが、その内容は、人口の量と質について検討したものである。彼はイギリスとウェルズの疾病および死亡統計を地域別に比較・研究し、貧困地域ほど疾病

率や死亡率が高いことを明らかにし、人口と貧困との間に高い相関のあることを示している。この書物に示されたティトマスの統計的知識と分析力は人びとを驚かし、この書物は多くの人びとの賞賛を受けた。たとえばシーボーム・ラウントリー (Seeborn Rountree) は「この本は重要で、かつ驚嘆すべきもの」とまで評している。そしてこの書物によって、ティトマスは多くの人びとと知り合い、さらにイギリス統計学会や経済学会の会員になることができたのである。その意味で、この『貧困と人口』の著書は、ティトマスの研究者としての登竜門となった記念すべきものであった。

それに加えて、『貧困と人口』という著作は、その問題意識の面でも重要な意義をもっていた。上記したようにこの書物は貧困が人口の質と量に如何に影響しているかを明らかにしたものであるが、この分析にみられた貧困あるいは不平等に対する挑戦は、その後のティトマスの研究の底を貫くモチーフとなっていく。ティトマスはこの課題を研究面で追求しただけでなく、その実践面においても貫き、やがて自由党支持者から労働党支持者に移行する一つの契機にもなっていくのである。

1939年、ティトマスは、経済指標に関連する死亡および生命表の分析的研究のため、2ヵ年間、ある財団から研究補助金を受け、さらに同年に F. L. グロス・クラークの『食糧問題』(Our Food Problem)の分担執筆者となり、次第に研究活動を広げていく。しかし、このような精力的な研究も本務である保険会社の業務の合い間を利用して行われたものであったが、ティトマスの研究面での関心が強まり、広がるなかで、いわば二足の草鞋ともいうべき状態を維持することが次第に困難になっていった。

3

1941年、ティトマスは、その人生の第2の転機ともなった K・ハンコック (Keith Hancock) 博士と知り合うことになった。当時ティトマスはカウンティ火災保険会社のロンドン支店の監査の地位にあった (それほど若くしてこの地位についた人は例がなかったほどであり、この面でもティトマスは卓抜した能力を発揮していたのである)。しかし戦争が始まるや、彼はその能力を買われて、戦時損害保険の業務につくことを求められた。しかしティトマスは、この求めは有難迷惑であり、むしろ研究的な業務につくことを望み、いろいろの伝手を求めた。

ハンコック博士を知ったのはその頃である。当時ハンコックは、戦時内閣のもとに設けられた戦時史の編集の

責任者であり、この仕事に従事する執筆者を求めている。ティトマスはこれを知り、ハンコックに手紙を出し、この仕事につく意志のあることを伝えた。これを機に、ハンコックの口添えもあって、ティトマスは戦時史の研究・編集に従事することになり、とくに保健省関係の分野を担当することになった。

この仕事を通して、ティトマスは研究者としての資質にさらにみがきをかけることになり、その知的能力を十分に開花させた。そしてこの仕事のなかで、彼の統計的知識と、社会問題に対する関心はさらに発展させられることになる。そしてそれらにまして重要なことは、イギリスの社会的諸サービス (Social Services) の歴史や、中央・地方の行政についての知識を摂取することになったことである。この期間に、彼は多くの資料・文献の蒐集分析を行う一方、公務員や吏員、保健オフィサー、看護婦、教育者、ソーシャル・ワーカーたちに会い、話し合い、さらに病院や各種の社会福祉施設等を訪問し、実地から多くのことを学んでいる。

この経験はその後のティトマスの理論研究の面に大きく寄与していることは明らかである。事実、後に彼がロンドン大学に移った以降の諸著作をみると、その科学的な洞察力和冷徹ともいうべき分析力に驚かされるが、それと同時にこれらの分析が現場の具体的でかつ細々した問題を十分に知悉した上で行われているだけに、説得力に富むものになっているが、それができたのは、この期間の勉強と経験の賜物であろう。

彼の戦時史の研究は1947年に『社会政策の諸問題』(Problems of Social Policy) という表題でまとめられた。彼はこれを原稿の段階で政府の各省に送り、コメントを求めたが、これに対しては各省庁によって評価は異なっている。たとえば保健・教育省は、この報告書を絶賛しているが、他方、大蔵省や内務省側は、あまりにも保健・教育省に偏りすぎていると行って批判を行ったりしている。しかし、この報告書が1950年に公刊されるや、各方面の反響は大きなものであった。たとえば T. H. マーシャル (T. H. Marshall) は「完ぺきな傑作」と賞賛している。

ティトマスは本務ともいうべき戦時史の執筆と平行して、例の『貧困と人口』に示されたモチーフに沿った研究も続けている。彼は1943年に『出生率と貧困・富』(Birth, Poverty and Wealth) という書物を公けにしている。この本はそれほど大きなものではなかったが、乳児死亡を分析し、それが恵まれた階級とそうでない階級の間に差があり、しかもそれは1920年代初めよりは30年

代の方が、その差は大きくなっていることを実証的に明らかにしている。そして1932年時点で、第一階級（富裕層）と同じ死産および乳幼児死亡率が他の階級にまで及んでいたならば、約9万人の人間がこの世に長らえたはずだと推計している。この指摘は、ちょうど『貧困と人口』という書物のなかで、貧困がいかに人口に悪い影響を与え、「社会的浪費」を生み出しているかということをも明らかにしたのと、同じ問題意識につながるものであった。

この研究に関連して、ティトマスはケイと共同で親子関係についての研究を行っている。この研究のモチーフは、何故人びとは子どもをかつてのようにたくさん持とうとしないのかということから出発しているが、それは同時に出生という人口学的事実の社会的意味の究明につながることもあった。その意味では上記の人口と貧困の問題意識に通ずるものである。1941年に書いた「経済的にみた親子関係の終焉」(‘The End of Economic Parenthood’) という論文はその研究成果の1つである。この論文についてB・ウェッブ(B. Webb)は、賞賛の手紙を出している。またこの論文が契機になって、ティトマスは、ケイと共同で『親の反乱』(*Parents Revolt*) という書物を出版したが、これも人びとの反響を呼んだ。これらの論文あるいは書物は、経済扶養の面から親子関係を究明しているだけでなく、その背景には資本主義のもつどん欲さと不安に対する激しい非難を含むもので、ティトマスの左翼的立場が示されている。

この左翼的立場は、ティトマスの政治的立場の変化とも関連しているようである。ティトマスはもともと政治的には、自由党支持者であったが、この頃から社会主義的傾向を強めていく。ティトマスは1941年に友人に出した手紙のなかで、親子扶養についての関心は自分を社会主義に近づけたが、この場合の社会主義というのは、経済的な起動力によるというよりは、むしろ道徳的な動機と結びついているという意味のことを述べている。その限りでは、彼は依然として自由党に席をおきながら、むしろ自由党のなかで、志を同じにする人びとと一緒にあって、自由党の左翼化に努めることになるのである。

ちょうどその頃、自由党の若い闘士といわれたR・アクランド(Richard Acland)は、『われ等が闘争』(*Unser Kampf*)という書物を公けにし、戦時中にこそ新しい社会の秩序を確立する段階とすべきであると主張し、私的所有に代って、共同所有(common ownership)にもとづく社会の建設を訴えた。このアクランドの主張にもとづき、自由党内に新しい左派勢力が結集したが、ティトマ

スもこの運動の支持を鮮明にした。このアクランドの運動は1942年に共和党(Commonwealth Party)の結成にまで発展する。ティトマスは戦時史編纂という公的な仕事に携り、身分的には公務員ということもあって、この政治活動に表立っては参加できなかったが、この共和党の運動に対して、理論的に多くの影響を与えている。この共和党は後に労働党と合体することになるが、それにつれてティトマスも労働党支持者に移っていった。

このように30歳中頃から40歳前半ぐらいまでのティトマスは、戦時史の研究という本務のなかで、とくに保健サービスおよび社会福祉サービスについての研究を続け、1950年以降の社会政策、社会福祉の学者として大成する基盤を築き上げてきたのであった。そしてこれらの一連の研究によって、ティトマスの学者としての能力は人びとから高く評価されるようになり、1950年には新設された社会医学研究調査会(Social Medicine Research Unit)の会長代理に任命されたりしている。

4

1950年、ティトマスはバーミンガム大学およびロンドン大学(LSE)の2つから、社会福祉管理論(Social Administration)の講座を担当するよう招聘された。ティトマスはロンドン大学を選んだ。彼の言葉によると、その生涯における第3番目の転機がそれであった。学歴もなく、何の学位をも持たない一介の研究者であったティトマスは、碩学T. H. マーシャルの後を襲って、ロンドン大学社会科学部の主任教授に赴任することになったのである。以来20年余、ティトマスは社会福祉管理学の研究とあわせて、ロンドン大学社会科学部の発展のために獅子奮迅の活躍をすることになるのである。

ティトマスの業績の第一は、教育者として数多くの人びとの薫陶にあたり、すぐれた人材を世に送り出す一方、ロンドン大学の社会科学部を社会福祉管理の教育・研究のメッカといわれるまでに育て上げたことである。この辺の事情について、ティトマスは、1962年ロンドン大学社会福祉管理学部(最初、この学部は社会科学部と称せられ、1912年に開設された)の創立50周年記念式典でつぎのように述べている。

「私がこの学部に着任して間もない1950年当時ですら……私たちはあまりにも忙しすぎて、このような問題(貧困問題——引用者)について、学問的に専念するわけにはいかなかったのである。しなければならない大切なことがあまりにもたくさんあったのである。たとえばソーシャル・ワーカー教育の実践とその開発

を図ること、現場での新しい処遇技術の開発、やらなければならない多くの実験的研究作業、執筆すべき著述、ソーシャル・ケースワークを開拓するための新しいコースや、外国人留学生を受け入れるためのコースの開講準備、そしてこれらに加えて社会科学会（学生自治会に相当するもの——引用者）の活動を通じて、日常的に学生団体と接触し、これらに刺激を与え、社会的訓練を与えるという仕事などがあったのであるが、トーマス・ハーディがその小説の1つのなかで、『愛情は決して止まることをしらない』といているが、この学部に関係するものは、たえず落ち着きのない生活をし、『世論を左右するような研究者の深い眠り』にふけるわけにはとうていいかなかったのである』（*Commitment to Welfare*, 前掲訳書57～58ページ）と。

この講演にみられるように、ロンドン大学社会福祉管理学部の建設には並々ならぬ苦勞を重ねている。ティトマスはその控え目な人柄の故もあって、苦勞したのは自分だけではないという意味で、常にわれわれというように複数で述べているが、それにしてもこの学部の建設と発展をなした中心人物こそ、ティトマスその人であったことは、関係者の等しく認めるところであった。

この学部の創設のためにはまず第一に社会福祉管理 (Social Administration) とは何かということを明らかに、それが何故学部として独立する必要があるかということ、大学（ひいては大学を構成している他の学問分野の人びと）当局や、社会の人びとに承認されることであった。このためには社会福祉管理についての理論的究明が不可欠なことであり、その理論づけは、ティトマスを措いて代るべき人は他にいなかったのである。その意味ではティトマスらの社会福祉管理学部の建設というのは、既成の学部——たとえば社会学・経済学、法律、行政学その他の新設とはちがった苦勞があったのである。

さらにそれと同時に、教育内容（カリキュラム）の検討、専攻コースの決定、学位あるいは免許状の新設等々の業務が重なってくる。これらの教育行政面での苦勞は、研究者にとっては、決して楽しいものではないが、ティトマスは、その真面目な性格もあって、これらの業務にも率先している。ティトマスはよくこれらの業務について「教授会の使い走り」と皮肉たっぷりにいつたりしている。

それに加えて、1960年代には例の学生騒動がロンドン大学でもおこっている。この事件は大学の運営・管理の面でも、さらにむずかしい問題を惹起させた。ティトマスはこの点についてつぎのように述べている。「最近、

ロンドン大学で学生騒動があった。まさにいままで1000人以上の卒業生を送り出した、イギリスで最も古い社会科学の府においてである。この学部は社会のなかで生活する人間を理解するためになんらかの能力をもつことが要求されているが、それだけに、この騒動は苦痛に満ちた経験であり、とくに屈辱的なことであった」（1967年4月ヘブライ大学での講演『大学の福祉と目標』、前掲書23ページ）と。ティトマスの誠実な人柄は、この騒動を対岸の火事として傍観することを許さなかった。ティトマスはこの騒動のなかにあつて真正面からこの問題を受けとめ、問題の解決に献身した。そしてこのなかでそれまで仲の良かった同僚、なかんずく、ラディカル・グループと称せられていた連中と、激しい対立をしたこともあったのである。

このようにロンドン大学社会福祉管理学部の建設と運営への犠牲的ともいえるような取りくみによって、この学部は、ロンドン大学のなかでも最大の規模をもつ学部となり、さらにこの種の学部としては、世界でも有数の学部にまで成長していくのである。この辺のことについて、ティトマスは上記の学部創立50周年の記念講演でつぎのように述べている。「私は1950年に前任者のマーシャル教授に代わって、現在の職責を引き継いだわけではあるが、それ以来、私たちが何かよいことをしたかどうかということになると、はなはだ心もとない次第である。ただ規模が大きくなったことが良いことであるとすると、私たちはたしかに良いことはしたといえるかもしれない」と述べ、学部所属の教員スタッフは1950年当時の13人から、現在は30人余になり、学生たちも増え、「本学部はヨーロッパにおけるこの種の学部のうち最大のものであり、北アメリカの同種の大学の最大のものとはほぼ等しい規模をもつ」までになったと述べている。このほかこの学部で教育を受けた人びとの数もおびただしいものがあり、しかもそのなかにはイギリスはもちろん、欧米およびアフリカ、アジアの諸国で、社会福祉分野のリーダー、研究者等として影響力をもつ人びとが輩出していることも注目されなければならない。

ティトマスはこのように大学の運営・管理、とりわけ、社会福祉管理学部の創設とその発展に大きな役割を果たしているが、同時に教師としても優れた能力を遺憾なく発揮している。彼は大学は職業教育をもっと重視すべきであるという考え方をもち、このために学歴にこだわらず現場の人びとにも門戸を開放すべきだという立場から、ロンドン大学にこの種の新しいコースを設けることに努力している。そして教育の面でも、この職業教育に

重点をおいたが、同時にその内容は可能なかぎりアカデミックであるように努めている。

彼の講義を聞いた人びとの印象によると、ティトマスは必ずしも雄弁家ではなかったが、しかし十分に準備された内容を静かに、じゅんじゅんとして語りかけるように話してくれ、説得的であったと。そしてその講義の間は咳一つしないほどの静かさであったともいっている。ティトマスは講義の面だけではなく、学生の1人ひとりに対して暖かい人間味あふれる態度で接し、学生たちはそれによって励まされ、深い信頼をティトマスにもつことになっている。ある人はティトマスによって「人間の素晴らしさ、知識についての魅力について、全く新しい世界を教えられた」と述べている。

このようなすぐれた教育者としての資質は、学生たちに示されただけでなく、同じ研究者仲間に対しても示されている。B. エーベル・スミス (Brian Abel-Smith) も書いているようにティトマスは意見を求める世界各国の行政官、政策形成に携わる人びとに親身に相談にのる一方、他の研究者の原稿にコメントを与えたり、新しい見方、把え方を示唆したりすることも多く、戦後に公刊された社会政策関係の書物のなかに、このティトマスの示唆と援助にあずかったものが少なからずみられているほどである (*Journal of Social Policy*, 1973 p. 192-193)。その意味でティトマスの直接・間接の教え子の数は世界各国に及んでいる。

5

このようなティトマスの教育者としての業績もさることながら、この業績を支えたものは何と云っても、その研究面での活躍である。ティトマスはロンドン大学で教鞭をとっていた20年余に、いくつかの論文、講演、著書を公にしている。このうち論文および講演の主なものは *Essay on Welfare State*, (1958) (谷昌恒訳『福祉国家の理想と現実』, 東京大学出版会, 1967年), *Commitment to Welfare*, (1968) (前掲訳書, 1971年) の2冊に収録されている。

この他著書としては、

1. *The Cost of the National Health Service in England and Wales*, 1956.
2. *Social Policies and Population Growth in Mauritius*, 1961.
3. *Income Distribution and Social Change*, 1962.
4. *The Health Services in Tanganyika*, 1964.
5. *The Gift Relationship*, 1970

がある。またティトマスの没後、B. エーベル・スミスとケイ・ティトマスの編で *Social Policy: An Introduction*, 1973 が出されている。

このようにみると、著書の数はいくつ多いものではない。しかしそれらに含まれる功績はきわめて大きいものがある。そのひとつは、社会福祉管理あるいは社会福祉に対して科学の光を与えたことである。すなわち「ティトマスがロンドン大学に赴任した当時、社会的諸サービスについて書かれた書物の大部分は、制度や組織の生の解説的記述に限られていた。……そしてそこでみられたものは神話と仮説のごったまぜに等しいものがほとんどであった」(M. コーウィング) という状況のなかで、ティトマスは社会的諸サービスの研究に科学の光をあて、多元的な分析の方法を示してくれている。

この研究のうち第一に注目しなければならないことは社会政策および社会福祉管理（それは日本的にいうと社会福祉ということになる）についての研究である。ティトマスは、社会福祉管理というものを、社会的諸サービスに関する政策形成とその運営管理 (Policy making and Administration) として把え、その研究の基礎には社会的ニーズの研究がなければならないと考えている。この点についてティトマスは、1967年のイギリス社会福祉管理学会・第1回大会で、社会福祉管理の課題について講演を行っているが、そのなかで社会福祉管理の研究課題を「基本的には一連の社会的ニーズの研究と、欠乏状態のなかでこれらのニーズを充足するための組織（それは伝統的には社会的諸サービスとか社会福祉とよばれるものである）がもつ機能の研究に携わること」と述べている (*Commitment to Welfare*, 前掲訳書, 15 ページ)。

そしてティトマスはこの社会的ニーズを充足するための組織・方法＝社会的諸サービスについて、それまでに広くみられたものは、政府の社会的諸サービスの分類概念が無批判的に前提とされていたとして、この種の分類が如何に非合理的なものであるかをつぶさに検討・批判し、むしろ社会的諸サービスを分類するとすると、社会福祉、財政福祉、企業福祉 (social welfare, fiscal welfare, occupational welfare) に分ける方がより包括的であると述べている ('The Social Division of Welfare')。しかしティトマスの第一の関心はこのような概念の分類とか、あるいは既存の制度化された社会的諸サービスの実施段階における組織上の方法ではなく、社会的諸サービスの機能なり、目的を明らかにすることにあったようである。このことは明示的にではないにしても、それまでの社会的諸サービスに関する見解が、制度の解説に終始しがちで

あったということに対するティトマスの批判を示すものであった。そして、あれやこれやの社会的諸サービスの諸形態、方法を現象的に追うのではなく、その底に流れる社会的諸サービスの目的なり、機能を究明することこそ、社会福祉管理学の建設に欠かすことのできないものと考えている。

もちろんティトマスは、これらの問題をけっして思弁的に、アームチェア・シンキング式に抱えようとしたのではなく、どちらかという、社会福祉管理の当面する現実的な課題を真正面にすえ、この諸課題の解明を具体的にはかることを通して、社会的諸サービスの目的と機能は何かを追求することになっているのである。そしてこれらの諸課題の追求を通しての社会福祉管理学は、つぎのような問題を検討しなければならないとしている。

1. 政策形成とその予測および予測外の結果の分析と記述
2. 構造、機能、組織、計画の研究と施設および機関の運営過程に関する歴史的、比較法的研究
3. 社会的ニードおよびニードへの接近方法に関する研究やサービスや処置、移転などの成果の活用と類型の研究
4. 社会的費用およびマイナスの福祉 (deswelfare) の性格、属性、分布についての研究
5. 時系列的に可処分資源の分布と分配を分析すること、および社会的諸サービスの特定の影響の分析
6. 議員、専門ワーカー、行政官および社会福祉制度が操作・運用されるばあいに関係するグループなどの役割と機能の研究
7. 被保険者とか社会的サービスの受益者およびユーザーという観点からみた、市民の社会的権利に関する研究
8. 社会法、行政法をはじめ、その他の諸規定に示される社会的諸施設の価値と権利を配分する（中央および地方）政府の役割に関する研究 (*Commitment to welfare*, 前掲訳書 18~19 ページ)。

ティトマスはこれらの研究の諸課題を提示しただけでなく、自らもこれらについて精力的な研究を続けたのであった。*Income Distribution and Social Change*, *The Gift Relationship* などの労作のほかに、上記した *Essay on the Welfare State*, *Commitment to Welfare* に収録されている多くの論文に、その努力をみることができる。

しかしこれらの努力にもかかわらず、社会政策あるいは社会福祉管理について、その体系化に成功したとはい

えない。この点についてかつてティトマスはつぎのようなことを述べている。「社会福祉管理というものは、一連の知識体系、またはいくつかの概念・原則の相互に関連した体系として展開しはじめたものであるように思われる。それは科学の属性の1つともいえるべき、知識の体系的確立という観点からみると、それは体系樹立の過程にあるのである」(前掲訳書、19 ページ) と。この記述のように社会福祉管理・社会政策は、その体系化の過程にあるものであり、ティトマスの力をもってしても、そこに含まれるあまりにも多くの課題をみるとき、ついには体系的に未完に止まらざるを得なかったのである。

しかし、それにもかかわらずティトマスの社会福祉管理についての研究は、多くの示唆と教訓を多くの人びとに与えていることは明らかである。たとえば「社会的市場」(Social market) の概念もその1つである。このアイデアは K. ボールディング(K. Boulding) の主張する社会政策のもつ統合的目標と関連して出されたもののようである。すなわち社会政策は経済政策と異なって、社会生活にかかわってくるとすると、それは自由市場とか価格メカニズム、利潤検証などと呼ばれている「経済的市場」では律しきれないものがある。したがって経済政策が何らかの形で、この「経済的市場」を前提とするのに対して、社会政策は一面ではこの経済的市場に係わりながらも、他方ではこれでは包みきれない部分——たとえば人間関係などの非経済的要素——が現われてくる。それをかりに「社会的市場」と名づけている。そしてティトマスは、経済的市場が、物財の相互交換という行為を媒介として同じように、社会的市場は贈与交換 (gift exchange) によって特徴づけられるものと考えていたようである。このテーマは少なくとも1960年代を通じてのティトマスの最も心血をそそいだものであり、その苦闘の1つの成果が1970年に公にされた *The Gift Relationship—from human blood to social policy* に示されたものとみることができる。

この *The Gift Relationship* は副題に示されるように輸血問題を取り上げたもので、イギリス、アメリカ、日本その他の国ぐにの輸血組織を比較検討すると同時に、このなかからある意味では価格的に表示しえない血液の供給システムはいかにあるべきかを論じている。そして経済的なシステムで供給する場合のデメリットを明らかにし、これに対して愛他的 (altruisme) で自発的な献血システムが何故に大切であるかを究明している。そしてそこでティトマスが明らかにしたかったことは、商品交換とは異なった「贈与交換」(gift relation) が現実には存

在し、輸血についての社会政策の重要な部分を構成しているということであった。いわばここにも「社会的市場」につらなる問題意識が流れているとみることができるのである。この「社会的市場」のアイデアは卓抜なものである。しかしそれは未だアイデアの域にとどまり、科学的な概念装置として定式化することはできないにしても、このアイデアは社会政策あるいは社会福祉の研究に重大な示唆を与えるものであることは疑い入れない。

あるいは社会的諸サービスに関連する普遍主義 (universalism) と選別主義 (selectivity) の問題も重要である。この普遍的な社会サービスと選別的な社会サービスの論議は、もともとは国民扶助をはじめとする各種のミーンズ・テストが、「貧困の烙印」(stigma) と結びつき、社会的諸サービスの受益者を「二流の市民」に陥れる結果を生んでいることに對する批判から出発しているが、これがとくに大きな問題となったのは1968年の家族手当の増額をめぐる動きに関連している。すなわち1967年、イギリス政府は家族手当の引上げを決定したが、その折にこれを低所得階層に限定するという方針を打ち出し、これをめぐって普遍主義と選別主義が発展したのであった。

ティトマスは、この問題については早くから関心を示していたが、とくに1960年代に入り 'Universal and Selective Social Services' (1967), 'Welfare State and Welfare Society' (1967), 'Choice and the Welfare State' (1966) (いずれも *Commitment to Welfare* 所収) などの論文で、この問題についての見解をまとめている。ティトマスはこの普遍主義と選別主義の問題を、二者択一的に把えるのではなく、普遍主義的な社会サービスの土台の上に、いかにして選別的な諸サービスが構築されるかというように考え、個人的に「貧困の烙印」とは異なり、受益者の権利を守り、福祉の効率を損なわない「積極的な選別」(positive discrimination) の在り方を追求している。

この問題とも関連して、ティトマスは社会政策 (= 社会福祉政策) のモデルを提示している。いわゆる「代替的モデル」(Residual Welfare Model of Social Policy)、業績主義的モデル (The Industrial Achievement-Performance Model of Social Policy) および制度的再分配モデル (The Institutional Redistributive Model of Social Policy) というのがそれである。「代替的モデル」というのは、アメリカの H.L. ウィレンスキーと C. ルボウ (H. L. Wilenski と Ch. Lebeaus) の「残余的社会福祉」(residual welfare) の概念に相当するもので、このモデルは個人のニードを充足させる「自然の」通路――

私的市場と家族――を前提として、これらのニード充足機構が十分に機能しない場合に、これに代って社会福祉制度が暫定的に機能するものとし、その例としてイギリス救貧法を挙げている。これに對して「業績主義的モデル」というのは、経済の付属物として機能する社会福祉制度と考えられ、それは社会的ニードの充足がメリット主義、業績主義、生産性との関連で行われるもので、労働意欲とか努力、報酬、階級または集団帰属性と結びついた経済学あるいは心理学的理論と結びついているものとしている。そしてこのモデルは財政および企業福祉 (fiscal or occupational welfare) の分野に広くみることができるとしている。最後に「制度的再分配モデル」は「社会福祉を社会における主な統合的制度としてみるもので、ニード原則にもとづく市場とは別に、普遍主義的なサービス (および選別主義的なサービスの双方)¹⁾ を具備したもの」と述べている。この第3の「制度的再分配モデル」をティトマスは、社会政策の統合的目標と結びつけ、今後の新しい社会福祉の方向と考えているようである。

しかしこの3つのモデル概念を披瀝した *Social Policy: An Introduction* は、もっぱら「代替的モデル」については、詳細に論じられているが、「業績モデル」、「制度的再分配モデル」については、必ずしも十分にページをさくことができず、このためにいま一つ、この後の二つのモデルについて判然としないところが残っている。きわめて示唆的な概念であっただけに、これらをいま少し詳しく論述するだけの時間があればと、その死のあまりにも早すぎるのがうらめしく思われる。

この他、社会福祉における利用者参加の問題、社会的効率と公共の概念など重要な概念が沢山提示されているが、これらについてはこれ以上の紹介は措くこととする。またそれらとは別に、年金を中心とする所得保障、保健サービス、医学教育、一般医 (G.P.) 問題、社会福祉におけるコミュニティ・ケア、老人福祉計画等々、イギリスの社会的諸サービスの当面している現実的で具体的な諸課題についても、いろいろのコメント・示唆を与えたりしている。これらについては上記の諸論文集および著書を参考にいただきたい。

ところでティトマスは上記の現実的で、かつ、具体的な諸問題を論じ、それと関連しながら社会政策 (社会福

1) このティトマスの3つのモデルは *Social Policy: An Introduction* 1973, および 'Developing Social Policy in Conditions of Rapid Change: The Role of Social Welfare', 1972. で述べられ、上記の括弧の分は1972年論文による。

社管理、社会福祉)の研究の枠組、分析方法などを究明しているが、そのなかで一貫して問い続けているモチーフがあったように思われる。

その1つは資本主義機構または社会に代るものは何かという問いのようである。それは彼の社会的諸サービスの研究では、資本主義的メカニズムのもとでの、社会的諸サービスの発展を期することに限界があるという認識と結びつく。それは社会主義者としてのティトマスの世界観にもかかわるものであった。もっともティトマスは資本主義の止揚の上に、社会主義を考えるというマルクス主義的な社会主義の立場に立つものではなく、むしろその点ではイギリスの経験主義の伝統に立つイギリス労働党の主張する社会主義に近いものである。そしてその立場は、上記の社会的諸サービスの発展を期する上での、資本主義的な私的所有、私的市場、価格メカニズム、利潤の極大化傾向などの資源配分の仕組みは、限界があり、これに代る仕組み・機構は何かという問いになって現われていく。そしてこのような立場から、社会保障との比較(たとえば 'Models of Redistribution in Social Security and Private Insurance')を行い、私保険の限界を批判したり、あるいはイギリス国民保健サービスを、市場メカニズムにもとづいて再編成しようとする主張に対して、きびしい批判を展開したりしている(たとえば 'Ethics and Economics of Medical Care')。そしてこれに対する批判などを行うと同時に、社会的諸サービスを支え、発展される基盤は何かを問い続けているのである。上記した「社会的市場」のアイデアがそれであり、*The Gift Relationship* のなかで展開させている愛他(altruism)にもとづく連帯の回復への志向もその証左であるのかもしれない。その意味でティトマスの問いは、資本主義=産業社会を超えるところの社会主義=「福祉社会」の在り方を追求しようとしていたともみることができるのである。

ティトマスの諸研究の根底を流れるあと1つのモチーフは、例の「貧困」の問題がある。これは上記の社会主義の追求と裏腹の関係をなすものであろうが、このモチーフは既述した30年代の『貧困と人口』以来のものであった。この問題意識はいろいろの論文にみることができ、なかんずくティトマスは1962年 *Income Distribution and Social Change* (『所得分配と社会変動』)を公刊し、貧困問題についての自らの主張をまとめている。この書物は所得分配を統計的に明らかにしたものであるが、とくにそのなかで、貧困をたんに生計費の不足とか経済的な意味での欠乏ということではなく、不平等

という概念で把えなおす必要を明らかにしている。この点について、ティトマスは、「社会制度の構造や機能に影響を与えた大きな変化、物的生活水準に広くあらわれた改善、そして現代社会での社会的疾病 (social ills) の原因と結果についての知識が増大したことなどによって、我々は貧困の再定義を行うことを求められている。生存費というものは、いまや科学的に意味をもたなくなっているし、また政治的には有効な概念でもなくなっている。我々は社会変動との係わりのなかで貧困概念を把え直し、さらに権力、権威、特権などのより複雑で専門化された諸制度との関連のもとで、貧困を解釈しなければならないと考えている。換言すると変動要因および不平等の特性を考慮することなくは、貧困の新しい領域を明確にすることはできなくなっているのである」(前掲訳書、189ページ)と述べている。

このような立場から、ティトマスは大学と大学教育を論じた論文、たとえば 'The University and Welfare Objectives' (『大学と福祉の目標』、1967)においては、労働者階級の子弟が大学に入学する率がいちじるしく低く、この面での不平等は由々しき問題であると批判したり、「婦人の地位——人口動態統計的研究——」(1952)という論文では、婦人の社会的経済的不平等の問題が取上げられている。

この視点は1960年代のいわゆる「貧困の再発見」の論議に大きな影響を与え、B. エーベル・スミス、P. タウンゼント、T. リンズ、その他の貧困研究を促進させている。またこのティトマスの考え方は、福祉の権利(welfare right)や、貧困児童撲滅運動(child poverty movement)等の社会運動に理論的根拠を提供することにもなっていたのである。

このように、ティトマスは、市場メカニズムあるいは価格メカニズムに根拠をおく資本主義的機構に対して批判を一貫して持ち続け、また資本主義体制のもとでの社会変動が不平等を増大させている点などについて、きびしい批判をもち続けているが、それはティトマスの社会主義者としての政治的・実践的立場につらなるものであった。そしてこの立場をティトマスは堂々と明らかにしてきている。ティトマスは1967年5月、ソ連のレニングラードで開かれた第16回国際社会保障協会総会(International Social Security Association)での講演でつぎのように述べている。「私はまず最初に自分の立場と価値観をあきらかにしておくべきであろうと思う。私は学生諸君の前では何時でもそうしているのであるが、彼らは私がいかなる立場をとる者であるかを知る権利が

あり、またそれを知ることによってはじめて私をよりよく批判し、反対意見を述べ、真理の追求に当って自らの見解をまとめ上げることができるようになると思うからである」と。このように自らの立場を価値前提 (Value promise) として明らかにしながらも、課題の追求に当っては、きびしい程の科学的態度を堅持している。そして自分とは異なった立場に立つものに対しては、その立場の故にそれを排除したり、あるいはその主張に対して偏見をいささかも持つことはしない態度を一貫して貫いている。それ故にこそティトマスの死は、立場をこえて多くの人びとから惜しまれることになっていたのである。

このティトマスの学問上の業績とその影響力は、イギリス国内だけではなく、広く海外において認められている。ティトマスは再三にわたって、アメリカ、カナダ、イスラエルその他から招かれ、講演や講義を行い、また上記した国際社会保障協会 (ISSA) や国際社会福祉会議 (ICSW) 等で講演等を行っている。こうしてティトマスは、この公刊された論文、著書を通してだけでなく、直接にその講義・講演を通して、その影響力を発揮してきたのであった。

6

教育者、学者としての活躍と並んで実際面でのティトマスの業績も見落とすことはできない。ティトマスは多くの公的な審議会、委員会、調査会等の公的機関の委員として活躍している。1960年代後半の大学紛争と名著 *The Gift Relationship* の著述に追われている最中でも、ティトマスは「補足給付委員会」(Supplementary Benefit Commission) の会長代理の重責を担うと同時に、「国民保険審議会」(National Insurance Advisory Committee), 「コミュニティ・リレーション委員会」(Community Relations Commission), 「王立医学教育委員会」(Royal Commission on Medical Education), 「片親家族福祉委員会」(One Parent Family Committee) 等の委員に就任している。そして1969年には「補足給付委員会」の委員長に推されているが、ティトマスはこれを断っている。そしてティトマスはこれらの各種委員会に属しながら、それらにほとんどすべてに可能なかぎり出席し指導的な役割を果たしてきた。

これらの公的な委員会活動と同時に、ティトマスは労働党員として、その政策形成にも大きな影響を与えている。たとえば1974年 (ティトマスの死後1年たって) 労働党の年金改革が行われたが、この原型をなすものは1953年の新しい「国民年金制度(案)」(National-Super-

Annuation Scheme) であった。この案はティトマス・グループと呼ばれる人びと (ティトマス、B. エーベル・スミス、P. タウンゼントなど) の案によるもので、従来のベヴァリッジ計画にもとづく、フラット年金に対して、賃金比例の拠出・給付を原則とする年金を建設することを主眼とするものであった。この案は1955年に労働党の年金改革案に取り入れられ、イギリスの年金改革の導火線になったことは記憶される必要がある。

またティトマスはもともとミーンズ・テストに対する批判を持っていた。それは被扶助者に「貧困の烙印」を与え、その自尊心を傷つけ、社会保障、社会福祉サービスの利用を妨げるものでもあったからである。この批判は当然「国民扶助法」のもつミーンズ・テストにもむけられ、「補足給付」への転換の一つの契機にもなっている。その後「補足給付委員会」の会長代理に就任したティトマスは、さらにこのミーンズ・テストの撤廃を主張する一方、この補足給付の権利化の徹底をはかることを示唆している。

このようにティトマスは、労働党の社会保障政策に対して、直接、間接に係わりながらそれを通して、1960年代以降のイギリス社会保障改革にいろいろの影響を与えてきたのであった。それに加え、ティトマスの実際面での影響力は、イギリス国内だけにとどまっていたのではない。たとえば1950年代の末にモーリシャスに招かれ、社会計画の策定を行っている。そして調査の結果、モーリシャスにおいては、人口抑制政策 (家族計画) がとくに重要であることを明らかにし、この人口政策を中心に、モーリシャスの社会政策の青写真を提示している。この報告書をもとにして公刊されたものが *Social Policies and Population Growth in Mauritius* (1961) であり、それは学術的に洛陽の紙価を高めただけでなく、モーリシャスの建設に多大の貢献を果たしている。またこれにひき続いてタンザニアの保健サービスについても实际的助言を行っている。ティトマスは1962年と68年の2回にわたって、タンザニアを訪れているが、ティトマスが最初に依頼されたのは、新興独立国タンザニアの保健サービスをいかに建設するかということであったが、むしろ調査の結果、保健サービスの建設もさることながら、むしろ教育に重点をおくべきであると助言している。きわめて实际的で、かつ、有効な助言である。このタンザニアの調査のなかで、大統領のニエレ (Nyerere) とティトマスは親交を深め、この他いろいろの助言を求められたりしている。

ティトマスの海外での活躍はこれにとどまらず、イス

ラエルでは、イスラエル大学での講義のほか、イスラエルの社会福祉政策についての助言を求められたりしている。またアメリカでは、学会を通しての影響力を発揮しただけではなく、非公式の形ではあるが、アメリカ社会保障庁に招かれ、アメリカの社会保障政策について助言を求められたりしている。

このようにティトマスの実際面での活躍は、国の内外に及び、高く評価されてきたのであった。この故もあって内気で遠慮深いティトマスの人柄には似つかわしくはないかも知れないが、数々の荣誉が与えられている。たとえば1964年に爵位の話があったが、ティトマスはこれを固辞している。しかしティトマスの遠慮深さにもかかわらず、その業績は人びとの認めるところとなっており、こうして1972年にはイギリス学士院の会員に推され、この他シカゴ大学、トロント大学、エディンバラ大学、ウェルズ大学、ブルユネル大学等から名誉博士号を授与され、イギリス、デンマークの両国から勲章を与えられたりしている。

何らの学位をもたず、大学教育はおろか、正規の教育らしい教育を受けることのなかったティトマスは、今やイギリスを代表する大学者となっていたのである。しかしティトマスのあの遠慮深く、控え目な人柄からすると、これらの荣誉はあるいは有難迷惑であったのかもしれない。

庭いじりはティトマスがとくに好んだ趣味であった。その自宅の庭には、世界各国の草花が咲きほこっていたという。ティトマスは現役をしりぞいた後の生涯を、愛するケイ夫人とともに、この庭いじりのなかで、長年の苦勞に疲れた身体をいやし、残された研究課題に取り組むことをいかに望んでいたことであろうか。しかし、病魔はこの最後の安らぎと、その研究の総仕上げの時期を奪ってしまったのである。

ティトマスは死んだ。しかし彼の残した社会政策、社会福祉に関する研究の枠組、分析の視点・方法や、それに彼が提起した社会保障・社会福祉に対する批判と、その克服の方向等は、今改めてその重要性が認識されてきている。わが国においても、戦後30年余を経過して、社会保障・社会福祉は、新しい在り方が求められているが、その場合、ティトマスの示唆した論点は貴重なものとなっている。その意味でティトマスは別の形で、現在も、そしてわが国においても生きているのである。

<参考文献>

- R. M. Titmuss: *Income Distribution and Social Change*, 1962 (Unwin University Press, 1962)
Essay on the Welfare State (Unwin University Press, 1958). 谷昌恒訳『福祉国家の理想と現実』(東京大学出版会, 1967)
 R. M. Titmuss: *Commitment to Welfare* (Unwin University Press, 1968) 三浦文夫監訳『社会福祉と社会保障——新しい福祉をめざして』(東京大学出版会, 1971)
 R. M. Titmuss: *The Gift Relationship—From Human Blood to Social Policy* (George Allen & Unwin, 1970)
 R. M. Titmuss (Ed. B. Abel-Smith & Kay Titmuss): *Social Policy—An Introduction* (George Allen & Unwin, 1974)
 R. M. Titmuss: 'Developing Social Policy in Condition of Rapid Change: the Role of Social Welfare' (Proceeding of the xvth International Conference on Social Welfare, 1972)
 B. Abel-Smith: 'Richard Morris Titmuss' (*The Journal of Social Policy*, 1973)
 M. Gowing: Richard Morris Titmuss (Oxford University Press, 1975)